

体育祭で「花田植」をモチーフにした
集団演技をすることについて

広島県立千代田高等学校
第3学年 向井 琉奈

体育祭で「花田植」をモチーフにした集団演技をすることについて

向井琉奈

私は、高校2年生の時、体育祭で行う「花田植」の田植え歌を担当しました。千代田高校は5年前から「ユネスコ世界無形文化遺産」の「壬生の花田植」をモチーフにして、体育祭で取り入れた集団演技を行ってきましたが、最初は歌はCDでやっていました。しかし、この年から生徒で太鼓、笛、鉦、歌も行うようにしたのです。先生から声をかけられた時、全校生徒の前で歌うことは恥ずかしいことでもあり、勇気のいることでもあったので躊躇していました。私が壬生小学校の出身だったので白羽の矢が立ったようです。壬生小学校は、毎年6月の第1日曜日に行われる「壬生の花田植」で、大人のに先だって「子ども田楽団」として、「子ども花田植」を披露しています。4年生全員が夏休みから練習を始め5年生の6月まで練習を重ねていきます。みんなで一つになって当日の発表を迎えるのです。先生から田植え歌の担当を何度するよう言われても断っていたのですが、壬生地区に育ったことや高校で「花田植」をモチーフにした集団演技をすることについて考えてみたいと思うようになり、引き受けました。わからないときには、壬生地区の人に聞いたら教えてもらえるのではないかという考えもありました。実際、「早乙女」をやっていた母や、田植え歌の音頭取りである「サンバイ」をやっている「壬生田楽団」の人にアドバイスをしていただき、無事やり遂げました。

「壬生の花田植」は、飾り立てた鞍を乗せた「花牛」と緋の着物を着た「早乙女」が登場し、田の神（サンバイさま）を田に迎えて、音頭取りの「サンバイ」の田植え歌に太鼓、笛、鉦などにぎやかなお囃子を合わせて、代掻きや田植えをするというものです。田の神と音頭取りの名前が同じなのは、音頭取りの役割が出来を左右するほど大切だからだそうです。私は、体育祭で田植え歌を披露する前に、地区の人の家に教えてもらいに行きました。歌詞と音を何度合わせて聞いても全くわからず、どうしていいかわからなくなっていたからです。このままではせっかく引き受けたのに投げ出してしまいそうでした。その人は、毎年のように「壬生の花田植」で「サンバイ」をやっている人で、とても温和な感じで私を優しく迎えてくれました。その人から「高校生が『花田植え』について聞きに来たり、歌を歌ったりすることは、普段あまりないことなのに、それをしている君はすごいね」と言って励ましてもらい、くじけそうな気持ちから俄然やる気が出ました。田楽は、昔まだ稲の苗を手で植えていた頃、朝からやっても夜までかかっていたので、それを楽器や歌などで応援するところから始まったそうです。「『早乙女』さんを元気づけるように、問いかけるように歌うのだよ」と教えてもらいました。

高校で「花田植」をモチーフにした集団演技をすることについて考えてみると、まず、地元を見直すきっかけになるという意味があります。「壬生の花田植」があつての高校での体育祭の集団演技なので、おのずと「壬生の花田植」のことや地元のことを考えるようになります。千代田高校は、3年前から「壬生の花田植」にボランティア・スタッフとして参加しています。私も参加し、約1万人という多くの人々が「壬生の花田植」を見るためにやってきて、最近では外国人も増えていることに、改めて「壬生の花田植」の魅力の大きさを感じました。「壬生の花田植」は、もともとは壬生地区の人のための生活の一部で

あり楽しみであったわけですが、平成 23 年「ユネスコ世界無形文化遺産」に登録され、北広島町教育委員会や町役場の全面的な支援を受け「地域の宝」となっています。千代田高校は、壬生地区出身者だけではなくそれ以外の地区や町外の出身者もいますが、体育祭で「花田植」をモチーフにした集団演技をしたり、ボランティア・スタッフとして参加したりすることで、私たちの「花田植」になり、北広島町やもう少し広い範囲を地元として考える視点ができるような気がします。

次に、「伝統を伝えていく」ということを考えるという意味があります。「壬生の花田植」のように、「代掻き」や「田植え」という稲作文化を遺し伝承していくことは、とても苦勞が多いとききました。確かに現在では農業が機械化され、牛で代掻きをしたり、手で稲の苗を植えている家は一軒ありません。それでも伝承していく意味は何なのでしょう。私がボランティアで「壬生の花田植」の行われている場所に立ったとき思い浮かんだのは、昔から人々が自然をうまく活用して生活を営んできた里山の風景でした。想像が広がり周囲の近代的建物が消えていました。そして、「ユネスコ世界無形文化遺産」の登録が影響しているのかもしれませんが、何千年も前から東南アジアや中国などで延々と稲作を行ってきた人々にも思いを馳せることができました。私は緑豊かな地元が大好きです。人々は優しくとてもいいところです。私はここで育ってよかったと思っています。だからこそ、これまでのことを考えることで、これからも地元の里山の自然を守って行きたいという気持ち生まれるのです。体育祭で「花田植」をモチーフにした集団演技することは、「伝統を伝えていく」ということを頭ではなく身体で思考することではないでしょうか。

最後に、集団演技をすることで全校がまとまるという意味があります。そこには、「見せる」という行為が関係しているかもしれません。地域の人々や保護者や卒業生に私たちの「花田植」を見てもらうという目的のために一致団結しました。もちろん「花田植」をモチーフにはしていますが、「壬生の花田植」とは別物です。ですが、それでいいと私は思っています。私たちの「花田植」を私たちの手で創作すればいいと思います。私が高校 2 年生で田植え歌を担当した時は、みんなと歌を合わせていくところで、また、つまずきました。歌うのですがタイミングが合わなかったり、私のせいで何回もみんなにやらせてしまったりして、とても申し訳ないと思ったことが、度々ありました。しかし、何回かやるうちにコツがつかめ、本番は完璧にできていました。コツコツ積み重ねていくと、やった分だけ成果が出るということもわかりました。そして、地域の人々や保護者・卒業生の人々の声援と拍手を聞きながら、千代田高校生としての団結を実感していました。

今年の体育祭では、私たち 3 年生がこれまでやってきたことを後輩に伝えていくことを考えました。そこで、私は後輩に「花田植」の田植え歌を教え、本番では二人と一緒に歌いました。最後まで間違えずに歌え、私はほっとしました。来年は、私の代わりに歌ってくれる人がいて、またその後輩へも伝えていってくれることを願っています。私は、卒業後、地元企業への就職が内定しています。壬生地区で育った者として、「壬生田楽団」に入りたいと思っています。そして、私も地域の伝統を守り、「壬生の花田植」という「地域の宝」で過疎高齢化の町を少しでも盛り上げようとしている大人たちの仲間入りをしたいと考えています。

〈指導者の言葉〉

この作品は、3年生「現代文B」の授業において、「他者が共感出来る体験活動」というテーマで課題を設定し、原稿用紙に書かせる指導を通じて作成したものです。

本校では、地域貢献活動を重点目標の一つに掲げ、さまざまな活動を行っています。そのため、生徒は日々、本校と地域とのつながりを考えながら活動に参加しています。「壬生の花田植」のボランティア・スタッフもそのひとつであり、地元を見直すよい機会となっています。体育祭では、「壬生の花田植」をモチーフにした集団演技を行うようになりました。

本生徒は、壬生小学校出身者として「子ども花田植」を経験しています。母親や地元の人には、「壬生の花田植」で役割を担ってきた人々が多くいます。そのような環境で「壬生の花田植」を身近に感じていました。体育祭で行う「花田植」の田植え歌を引き受けるにあたり、高校で「花田植」をモチーフにした集団演技を行うことの意味や自分が将来「壬生の花田植」と向き合う意味をもう少し深く考えたいと思うようになったようです。

指導に当たって、高校で「花田植」をモチーフにした集団演技を行う意味について書くときには、その主旨が明確に伝わるように具体例を用いて分かりやすい表現で書くよう指導しました。また、「壬生の花田植」や「子ども花田植」について全く知らない読み手にもわかるように配慮して書くよう助言しました。

今回の受賞が励みとなり、本生徒が地元の伝統文化を担い地域に貢献できる人材として活躍することを期待します。